

基 調 講 演

Sense of Wonder を育む科学と環境づくり

小泉英明 (株式会社 日立製作所 役員待遇フェロー
社団法人日本工学アカデミー 理事・国際委員長)

『センス・オブ・ワンダー』(The Sense of Wonder)は、レーチェル・カーソン (Rachel L. Carson, 1907～1964) が遺した美しい本の題名です。古くはソクラテス (Socrates, 470～399 BC) が “Wisdom begins in wonder” という言葉を残しています。古代ギリシャでは、哲学と自然科学は分離していませんでした。大自然や人間の不思議に素直に目を見張り、驚き、そしてなぜだろうと思いを馳せたのです。自然哲学者のルクレチウス (Titus Lucretius Carus, 99～55 BC) も長編の叙事詩『物の本質について』のなかで、自然界のさまざまな現象に思索を廻らせています。

「科学する心」(Mindset of Science) も、幼い頃から芽生え始めます。この純粋な気持ちを育むことはとても大切だと思います。「科学する心」をできるだけ簡潔にまとめてみますと次の5項目になると考えています¹⁾。

1. 自然の素晴らしさに深く感動する心、そして好奇心
2. 事実を率直に認め、決してごまかさない心
3. 偏りや思い込みなしに、率直に判断し行動する心
4. 自然に生かされる命を大切にすること
5. 多様性を尊び相手を思いやる心

この冒頭にくる第1項が、Sense of Wonder に近いと思います。

私は詩人のような天才科学者ピエール・キュリーにとっても興味を持っています。ピエールは学校から阻まれて、医師であり博物学に興味を持っていた父が、自

然のなかで教育したのです。大学への資格試験を経て、やっと通常の教育環境に戻りました。やがて学歴などに阻害されながらも、妻のマリー・キュリーとともに科学する心を持ち続け、数多くの極めて本質的な発見や発明を残したのです。

「科学する心」の第4項と第5項は、私たちの生存規範という意味合いを帯びています。これらは古くからの戒律とは異なり、科学が明らかにしつつある動物進化やヒトの脳の構造・機能から、なぜ、これらが大切なかを説明できる可能性があります。多くの人間が地球上で充実した一生を送るための生存規範の一部であるとも考えられるのです²⁾。

〈参考文献〉

- 1) 小泉英明他編著：『幼児期に育つ科学する心』, 小学館, 東京 (2007).
- 2) Koizumi, H., “A New Science of Humanity: A Trial for the Integration of Natural Sciences and the Humanities towards Human Security and Well-Being”. In “What Is Our Real Knowledge About the Human Being?” (Sorondo, M.S., ed), The Pontifical Academy of Sciences, Vatican (2007).

—プロフィール—

小泉英明 (こいずみ・ひであき)

株式会社日立製作所 役員待遇フェロー。1971年、東京大学教養学部基礎科学科卒業後、日立製作所に入社。2004年から現職。また、東京大学先端科学技術研究センター客員教授を経てボードメンバー、東京大学総合文化研究科・同教養学部運営諮問会議委員、東京農工大学経営協議会委員、(社)日本工学アカデミー理事・国際委員長ほか多くの役職を務める。近著に『脳の科学史』角川SS新書(2011)、『脳科学の真贋』日刊工業新聞社(2011)、『童の心で：歌舞伎と脳科学』(市川團十郎と共著)工作舎(2012)があるほか著書・編著書多数。

